

文法研究における「記述」とその展開

三宅知宏（大阪大学）

1. はじめに

本発題は、現代日本語の広義の「文法」を主要な対象とする研究に限定して、1980 年代から現在（2025 年）に至るまでの研究史を概観しつつ、「記述」ということについて、その展開のあり方を含めて述べることを目的とする。

本発題は、本シンポジウムの一端を担うというだけでなく、今年度、行われた以下の発題を背景に持つものである。

- ・日本語文法学会チュートリアル「記述の方法」（オンライン）
 渋谷勝己(2025)「方言文法の記述の方法 一個別の文法事象を対象に母方言話者が行う場合」
 前田直子(2025)「日本語教育文法の記述の方法 一学習者に役立つ文法記述を考える」
- ・日本語／日本語教育研究会第 17 回大会（学習院女子大学）
 森山卓郎(2025)「言語習熟とこれからの文法教育」
- ・関西言語学会 50 周年記念シンポジウム「理論と実証の最前線 I」（大阪大学）
 三宅知宏(2025)「日本語学における理論と実証の最前線」

2. 研究史の概観（極めて簡略）

・国語学会（現.日本語学会）の機関誌『国語学』における 2 つの「展望 文法（理論・現代）」

①尾上圭介(1984)

表 1 尾上(1984:24)の「一覧表」を簡略化したもの

	説明派（文章派）		非説明派（非文章派）	
	論理構造対応派	語性－用法派	用法登録派	モデル派
根拠・解釈派	〈原理派〉	〈表現文法派〉	——	——
一面照射派	——	〈語類別衡量派〉	——	〈振り分け派〉
組織的記述派	——	——	〈用法登録派〉	〈プラネタリウム派〉

<以下引用> pp. 23-25

以上、表中に位置すべき研究のほかに、自身では体系を目指さない種類の研究がある。〈個別記述派〉と〈ゲリラ派〉である。個々の問題についての文法事実の究明はすべての表内諸流派の立論の基礎となるものであり、すべての流派に活用される可能性を持つ。また、三上章氏の論述などに代表される〈ゲリラ派〉の研究はあちこちの問題について注目すべき視点をうち出して表内諸流派に刺激を与えることになる。

「組織的記述派」の記述組織が単なる記述の書式として利用された場合には、それは既に〈個別

記述派) ないし〈ゲリラ派〉に属するものとして位置づけられるべきであり、この意味で〈用法登録派〉〈プラネタリウム派〉は〈個別記述派〉〈ゲリラ派〉に近接しているということもできる。

②田窪行則(1998)

＜以下、複数ページからの引用＞

～日本語の語彙、表現の使用規則に関する記述的論述、すなわち、「語法研究」に分類されるものが非常に多い。このような語法研究が、日本語教育や、辞書の作成にとって非常に重要な研究であることは疑い得ないが、いくつかの語彙を恣意的に取りあげ、その語彙を記述するためだけに作った直観的記述を一つの独立とした論文として扱うことには、抵抗を覚える。p.31

今回評者の目に触れた論文の多くが、語法の研究と分類できるものであった。特定の言語表現を取りあげ、その用法を分類し、共通する意味を取りだすもの、あるいは、複数の類似した言語表現に焦点をあて、その相違点を記述するもの、などである。(中略) 非常に面白い観察があるものもあるが、多くの場合は、用法を直観にもとづいて分類、整理しているにすぎず、従来の、辞書、文法書の言いかえを越えない。p.33

特定の語、構文を取りあげて、その用法を分類することが日本語という言語の特徴、ひいては、言語そのものの特徴の解明にどのような寄与をするのかは、あまり明らかではない。その語、その構文の用法の分類は、説明されるべき現象の提示であり、説明の対象を構成するだけである。それらの形式がなぜ複数の振る舞いをするのか、複数の形式がなぜ重なり合う分布をするのかを、分類に使った基準より少ない数の基準で説明するか、あるいは、別のすでに一般的になっている基準から導出するか、ができなければ一般化とはならない。p.34

理論的基盤のない語法研究について、単一では論文とみなすべきではないと述べたが、語法研究自体は、日本語教育の基礎データとして、また、理論研究の材料として非常に大切である。p.37

・日本語文法研究において「記述」「記述的研究」と呼ばれることが多い研究

日本語の文法研究において、多くの場合、「記述」「記述的研究」は、“特定の言語理論に基づかない”“過度に抽象的な説明を目指さない”“歴史的な研究ではない”“他言語あるいは方言との対照ではない”等、消極的な定義で把握されることが多い。特定の言語理論に基づく研究のことを「理論的研究」とすると、「記述的研究」は、特に「理論的研究」と対立的に捉えられることが多いと言える。

※日本語文法学会の学会誌『日本語文法』における「展望」(過去3年間の研究動向の紹介、評価)の分野区分は、長く「記述的研究と教育的研究」／「理論的研究」／「対照研究」／「歴史的研究」／「方言研究」の5分野だった。この点からも「記述的研究」が「理論的研究」等と対立的に捉えられていることが分かる。(ただし、このような区分は、2022年からは「現代語」／「古典語・歴史」／「方言」／「日本語／国語教育」の4分野に再編された。) ちなみに、上の5分野時代の「理論的研究」の展望記事は、長きにわたって、生成文法と認知言語学の専門家にそれぞれの動向を解説してもらうスタイルであった。

→このような現状については、以下の文献で述べられている。

- a. 三宅知宏(2017a)「日本語学の課題 ―「記述」と「理論」の壁を越えて―」
 - b. 三宅知宏(2017b)「文法性判断に基づく研究の可能性」
 - c. 森山卓郎・三宅知宏・森篤嗣(2010)「日本語文法学界の展望（2005年1月～2008年12月 記述的研究と教育的研究）」
 - d. 大木一夫・天野みどり・三宅知宏(2019)「日本語文法学界の展望（2015年1月～2017年12月）記述的研究と教育的研究」
- ※ c. d. は日本語文法学会の学会誌における「展望」（鼎談形式）であるが、約10年の経過があっても、状況は大きくは変わっていないことが指摘されている。
- ※ 一方、「理論的研究」において、日本語をデータとした場合に、日本語研究をあまり顧みないことによる、データの選択、適切性に問題が散見されることも指摘されている。
- ※ 山泉実・窪田悠介(2025)『言語学を科学哲学する』大修館書店

→このような「記述」は、正しい意味での「記述」ではない。

3. 「記述」をめぐる

- ・「観察」―「記述」―「説明」
- ・「記述」：観察された言語データに基づいて、何らかの一般化がなされること
 - 「記述」だけでは研究として完結しない
 - 次のような展開が必要
 - i. 包括性、網羅性への追求（当該言語の「参照文法」（加藤(2022), 渡辺(2022)））
 - ※下地(2018)
 - ii. 教育等への応用 ※前掲の前田(2025), 森山(2025) ※「日本語教育文法」
 - iii. 理論的な説明 ※本発題
- ・「良質の記述」
- ・“てある”の分析（益岡(1987)）
 - A1 型：リビングテーブルには花が飾ってある。
 - A2 型：入口に近い片すみが一畳余りの広さだけあけてある。
 - B1 型：荷物も所持金も一切をレイクサンドのホテルに残してあった。
 - B2 型：京都府警に鑑定をたのんである。（益岡（1987）より抜粋）

4. 理論的な説明への展開を視野に入れた「記述」

・本来的な「理論」は、言語現象、あるいは言語に関する能力そのものを説明するためのモデル、枠組み、道具立て等であるが、日本語の文法研究においてこの用語を使用する際は、「生成文法」等の特定の言語理論を指すことが一般的である。特に「理論的研究」という場合はそれが顕著である。換言すると、ある程度の数の研究者が、大まかであっても枠組みを

共有し、検証し合えるものという認識がある。

・このような「理論」「理論的研究」は、日本語の文法研究においては活発とは言えない。特定の理論的前提の中だけで意義がある（と思われる）研究が好まれないこと、他の研究者と共有できたり、幅広く様々な言語現象に適用できるモデル、枠組みを追究しようとすることにあまり積極的ではないこと等が主な要因である。

※「山田文法」「渡辺文法」「寺村文法」のように、個人名を冠して「～文法」のような呼び方が多用される（好まれる）ことと対照的である。

※日本語のデータを用いていても、特定の言語理論に基づく「理論的研究」の担い手は、大学では日本語学に関する講座ではなく、英語学／外国語学／一般言語学に関する講座に属していることが多いことも示唆的である。

・望まれる研究方略

- (1) 優れた「理論」が持つ予測性に基づくことにより、新たな言語現象の発掘や、既に知られている言語現象の再解釈を行い、より精度の高い「記述」を目指すきっかけとする。
- (2) 「記述」された内容の「説明」、あるいはより高いレベルの一般化（より少ない手段による一般化）を目指す際に、優れた「理論的研究」の成果を援用することを試みる。
- (3) 新たな言語現象の観察、記述、そして理論的な説明までを、全て覆った研究は望ましいが、おそらくそれができる個人の研究者は極めて少ない。また一人で行う必然性もない。良質の記述のみを行う研究、それを前提に理論的な説明を行う研究は、単独でも意義がある。1本の論文としてみなすことに抵抗はない。

→次の論集は、そのような試みとして、評価される。

藤田耕司・西村義樹(編)(2016)『日英対照・文法と語彙への統合的アプローチ』開拓社

5. 事例研究：

5-1. 疑似条件文（三宅(2016)）

- (4) お腹が空いているなら、冷蔵庫にプリンがあるよ
- (5) ガソリンが切れそうなら、この先にスタンドがあるよ
- (6) If you are hungry, there is a flan in the fridge.

→前件と後件の間に直接の因果関係がない。後件のみが真である。

- (7) If you want to know, ten isn't a prime number.

- (8) a. *お知りになりたいのなら、10は素数ではありません

b. お知りになりたいのなら、お教えしますが、10は素数ではありません

→英語に比べて、日本語はあまり生産的ではない。

→条件節形式が“～なら”（変種を含む）で、かつ主節述語が広義の存在表現。

- (9) お腹が空いているなら、冷蔵庫にプリンがある（よ／*φ）

(10) a. お腹が空いているなら、冷蔵庫にプリンがある (ぜ／ぞ)

b. お腹が空いているなら、冷蔵庫にプリンがある (*ね／*わ／*よね)

→日本語の疑似条件文は、主節末に特定の終助詞（典型的には“よ”）の生起が必要。

※「形態的有標性の仮説」（三宅(2011)）

→前件が直接、関係を持つのは“よ” → “よ” ≡ 遂行節

(11) どうせオレは合格できなかった (よ／*φ)

・「遂行分析」と、いわゆる「カートグラフィー」「機能範疇 “Force”」

・長谷川信子(2016) ※ 藤田・西村(編)(2016)

・定延利之(2016)『コミュニケーションへの言語的接近』ひつじ書房、

同(2019)『文節の文法』大修館書店、同(2024)『やわらかい文法』教養検定会議

・廣瀬幸生「三層モデル」

5-2. 発見構文 (三宅(2017c))

(12)a. 外に出てみると、雨が降っていた b. 外に出ると、雨が降っていた

→“～と”による「条件文」の一用法：「発見の用法」（前田(2009)）

→このようなタイプの条件文を、特定の型と意味が対応する「構文」としてとらえる。

(13) [X] {と／たら}, [Y].

(14) Xの後、ある状態を知覚し、その状態がYであると了解する

→発見構文の構文的意味の一部分を“～テミル”が担っている：“～後”の部分で“～テ”，
“～知覚し”の部分で“ミル”

(15) Leaving the bathroom, the lobby is fitted with a pair of walnut wall cabinets.

→「懸垂分詞構文」（早瀬(2012)）

(16) a. 彼女が家に帰ってみると、裏口のドアがこじ開けられていた。

b. She returned home to find her back door forced open (西村(2000))

→日本語の「発見構文」はごく自然な表現であるのに対し、英語の「懸垂分詞構文」は規範的な表現ではない。

※「主体性」(subjectivity)：話者が事態の内部に入り込んだ形で、そこから見えたままを描写する事態把握 (早瀬(2012))

→日本語は、「主体的」な事態把握が好まれる。→“～てみる”の随意性

(17) a. When I opened the door, a strange woman was standing by the window.

b. When I opened the door, I saw a strange woman standing by the window.

(a.は日本語母語話者, b.は英語母語話者の作文例) (両例とも早瀬(2012))

(18) a. *その会が終わってみた b. *その会は、終わると、盛会だった

c. OKその会は、終わってみると、盛会だった

→条件節が非意志的行為の場合は、「主体的」な事態把握が困難。行為の主体が意志性を持たない場合、典型的には「人」ではない場合、概念化者が入り込む余地がない（身を置く場所がない）ため。→“～テミル”が必須

・「主体性」 ・「補助動詞」のいわゆる「文法化」 ・「構文」

5-3. 助詞“も”を伴う否定対極表現とアクセント（三宅(2022ab)）

(19)そこにあるものは なにも 食べなかった / *食べた

(20) “なにも” [なにも^ー] [*な^へにも] (“なに” [な^へに])

(21)その店に客は 一人も 来なかった / *来た

(22) その店に客は 二人も (三人も / 10 人も / …) 来なかった / OK 来た

(23) “一人も” [ひとりも^ー] [*ひと^へりも] (“一人” [ひと^へり])

(24) “二人も” [*ふたりも^ー] [ふた^へりも] (“二人” [ふた^へり])

※アクセントの平板化と「否定対極表現 (NPI)」になることの関係について、先行研究では、「アクセント」に関する研究、「不定語」に関する研究、「否定」に関する研究、助詞「も」に関する研究のいずれも、規則として一般化していない

(25)「不定語」及び「最小表現の数詞“1”を含む名詞句」に助詞“も”が後接することにより、生産的に形成された形式は、「全部否定」の意味を表す「否定対極表現 (NPI)」としての性質を持つとき、そしてそのときに限り、平板型アクセントになる。

(26)助詞“も”を後接した場合の「不定語」の分類

A 類：“だれ” “なに”：常に NPI になる（ただし特定の構文を除く）

B 類：“どこ” “どれ”：NPI になる場合とならない場合がある

C 類：“いつ”：常に NPI にはならない

(27) a. だれもが来なかった b. だれもが来た

(28) だれもかれも / なにもかも / どこもかしこも

(29) a. なにも, そんなに厳しく言うことないでしょ。

b. なにも, 私は君が憎いから言っているわけではない

(30)「この企画案, 知ってる?」「知ってるもなにも, ぼくが立てた案だよ。」

・「音韻論」と「統語論」の接点
・コーパスの「ブースターの使用」

6. おわりに

本発題のまとめ：前掲の(1)(2)(3)

本シンポジウムの趣旨との関係

- ・「進化」→「生物学的な正しい意味」と「日常的に使われる意味」 ※「進化言語学」
- ・(比喩的に) 前者の意味において、日本語の文法研究は、「進化」はしていない／する必要はない。(古い形質をにとって代わり、新たな形質を獲得するほどの変化はない／不要)
- ・後者の意味において、日本語の文法研究は着実に進歩、発展している。

参考文献

- 大木一夫・天野みどり・三宅知宏(2019)「日本語文法学界の展望 (2015 年 1 月～2017 年 12 月) 記述的研究と教育的研究」『日本語文法』19 巻 1 号 pp.90-97 日本語文法学会
- 尾上圭介(1984)「昭和 57・58 年における国語学界の展望 文法 (理論・現代)」『国語学』137. pp.20-34
- 加藤重広(2022)「日本語の参照文法書をめぐって—なぜ日本語の参照文法は書かれないか」『アジア・アフリカ言語文化研究 別冊』No.2 pp.21-37 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 下地理則(2018)『南琉球宮古語伊良部島方言』くろしお出版
- 田窪行則(1998)「平成 8 年・9 年における国語学界の展望 文法 (理論・現代)」『国語学』193. pp.31-38
- 寺村秀夫(1981)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 西村義樹(2000)「対照研究への認知言語学的アプローチ」坂原茂(編)『認知言語学の発展』pp.148-165 ひつじ書房
- 長谷川信子(2016)「「擬似条件文」の統語構造 —三宅論文の「係り結び」的一般化の統語的考察—」藤田耕司・西村義樹(編)『日英対照・文法と語彙への統合的アプローチ』pp.372-379 開拓社
- 早瀬尚子(2012)「英語の懸垂分詞構文とその意味変化」畠山雄二(編)『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』pp.57-69 開拓社
- 藤田耕司・西村義樹(編)(2016)『日英対照・文法と語彙への統合的アプローチ』開拓社
- 前田直子(2009)『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 益岡隆志(1987)『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版
- 三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
- 三宅知宏(2016)「日本語の疑似条件文をめぐって」藤田耕司・西村義樹(編)『日英対照・文法と語彙への統合的アプローチ』pp.352-371 開拓社
- 三宅知宏(2017a)「日本語学の課題 —「記述」と「理論」の壁を越えて—」西山佑司・杉岡洋子(編)『ことばの科学』pp.74-96 開拓社
- 三宅知宏(2017b)「文法性判断に基づく研究の可能性」『日本語文法』17 巻 2 号 pp.3-19
- 三宅知宏(2017c)「日本語の発見構文」天野みどり・早瀬尚子(編)『構文の意味と拡がり』pp.65-78 くろしお出版
- 三宅知宏(2022a)「日本語の否定対極表現とアクセント (Ⅰ)—「不定語」に助詞“も”が後接する場合—」『待兼山論叢 日本学篇』第 56 号 pp.1-17 大阪大学文学会
- 三宅知宏(2022b)「日本語の否定対極表現とアクセント (Ⅱ)—「最小表現の数詞“1”を含む名詞句」に助詞“も”が後接する場合—」『現代日本語研究』第 14 号 pp.1-14 大阪大学大学院 人文学研究科 基盤日本語学講座 現代日本語学研究室
- 森山卓郎・三宅知宏・森篤嗣(2010)「日本語文法学界の展望 (2005 年 1 月～2008 年 12 月) 記述的研究と教育的研究」『日本語文法』10 巻 1 号 pp.131-138 日本語文法学会
- 渡辺己(2022)「理想の参照文法書に向けて」『アジア・アフリカ言語文化研究 別冊』No.2 pp.7-20 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所